

王子山遺跡の炭化植物遺体と 南九州の縄文時代草創期 土器群の年代

Radiocarbon Dates of the Charred Plant Remains Excavated
from the Oujiyama Site, and Comparison with Dates
of the Incipient Jomon Pottery on the Southern Kyushu, Japan

工藤雄一郎

KUDO Yuichiro

はじめに

- ①分析対象遺跡の概要
- ②分析試料と分析方法
- ③分析結果
- ④考察
- ⑤まとめと課題

【論文要旨】

宮崎県王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化植物遺体の¹⁴C年代測定、鹿児島県西多羅ヶ迫遺跡および上床城跡遺跡から出土した縄文時代草創期から早期初頭の土器付着炭化物の¹⁴C年代測定、炭素・窒素安定同位体分析を行ってその年代的な位置づけを検討し、土器付着物については煮炊きの内容物の検討を行った。王子山遺跡の炭化コナラ属子葉と炭化鱗茎類は縄文時代草創期のものであることを確かめた。これらは縄文時代草創期の南九州において、コナラ亜属のドングリやユリ科ネギ属の鱗茎が食料として利用されていたことを示す重要な例である。一方、西多羅ヶ迫遺跡の無文土器は、隆帯文土器の直後の時期に位置づけられると推定され、鹿児島県建昌城跡から出土した無文土器の年代とも比較的近いものであった。ただし、炭素・窒素安定同位体分析の結果から、煮炊きの内容物に海産物が含まれている可能性も考えられるため、正確な年代的な位置づけについては課題を残した。これらの無文土器は縄文時代早期初頭岩本式よりも、隆帯文土器の年代により近いことが分かったことは大きな成果である。上床城跡遺跡の水迫式～岩本式の土器は、これまでの縄文時代早期初頭の土器群の年代と良く一致している。縄文時代草創期から早期初頭の土器群や関連する遺構群、植物質遺物の¹⁴C年代測定例、土器付着炭化物の安定同位体分析例を蓄積していくなかで、隆帯文期の生業活動の解明、その後の消滅、縄文時代早期初頭の貝殻文系土器群の登場に至るプロセスとその実態を明らかにしていくことが重要である。

【キーワード】 縄文時代草創期、炭化植物遺体、土器付着炭化物、¹⁴C年代測定法、安定同位体分析